

## 『とはずがたり』巻二に描かれた 「色好み女房」としての自画像とその意義

邱<sup>キョウ</sup> 春泉<sup>シュンセン</sup>（北京外国語大学博士課程、国文学研究資料館外来研究員）

『とはずがたり』前篇に描かれている後深草院二条の宮廷生活については、「華麗な宮廷生活」、「後深草院宮廷の人気者」などのような指摘が多い。但し、男女関係を別とすると、二条の宮廷における活躍ぶりを示す記事が主に巻二に集中していることがわかる。宮廷貴紳の間で話題の中心になったことも、筆頭女房として晴れがましく振る舞ったことも、男性からの求愛を楽しんでいたことも、先行作品に描かれた「色好み女房」の性質に共通している。

次田香澄氏は巻二の性格を「作者が宮廷生活で最も時めいた時代に属し、彼女の奔放な行動、自我の主張の二事件がそれを代表している」と規定した。しかし「色好み女房」を思わせる行動は二条の人生において「時めいた時代」のスケッチとは言い切れない。「色好み女房」とは、宮仕えの場で花形の役を演じ、男性の興味を引き起こす存在であると同時に、軽々しいと軽蔑される存在でもある。「色好み女房」の生き方を選んだ人は「幸い人」になりかねるのである。

『とはずがたり』全篇を通じて現れている二条の高い志向からして、巻二に描かれた「色好み女房」の生活は宮廷生活の挫折を物語っている。巻一における国母となる夢の破滅から引き継いで、巻二における女房としての活躍が始まる。「色好み女房」としての振舞はさらに巻三において二条が権力交易の道具的な存在と化することへと繋がってゆく。前篇の宮廷生活に関する記事の配列から二条の破滅の軌跡を辿ることができる。

巻二における二条の「色好み女房」としての側面は、二条の人生の根本的な

矛盾を露呈している。女房気質と名門令嬢の自恃をあわせて持っている二条は父を失った後、たちまちに華やかに「色好み女房」として活躍する一方、混乱した男性関係に足を踏み入れ、取り返しのつかない境地に陥ってしまった。「色好み女房」としての自画像に二条の自分の人生に対する苦い反省を読み取ることができるのである。

# 村上春樹『海辺のカフカ』にみる魔術的世界観の土壌

ダ ル ミ カ タ リ ン  
DALMI Katalin (広島大学大学院博士課程)

村上春樹の文学が国境を越えて大きな人気を集めている理由は、これまでも多く指摘されてきたように、彼の独特なスタイルに求めるべきであろう。村上文学のこのような特殊性を「魔術的リアリズム」と関連付けて読解するというアプローチは、海外の村上研究においては多少論じられてきたが、日本では比較的新しい概念である。本発表では、村上文学を日本型魔術的リアリズムとして位置づけた上で、村上の魔術的世界観の由来について考えたい。そのため、二〇〇二年に発表された長編『海辺のカフカ』を中心に、これまで軽視されてきた村上文学における仏教や古典文学の影響、つまり村上の魔術的リアリズムの背景について論じることとする。

近年ではラテンアメリカだけではなく、世界諸国の文学にも魔術的リアリズムとみられる作品が続々と発表されている中、幻想的な要素に富んだ現実的な世界を描いている村上のフィクションは、その代表作の一つだと言える。一見すると、日本の文学と魔術的リアリズムはお互いに、大きくかけ離れたもののように見えるのだが、日本の伝統的な信仰システムや文学は、現実とファンタジーの融合から成り立っている魔術的リアリズムの概念を受け入れるための理想的な土壌だと考えられる。村上春樹の魔術的世界観の背景や由来は、特に『海辺のカフカ』の分析を通して明確になる。

〈生と死〉や〈夢と現実〉という、両極にある二つのものを一つの空間に溶解させる『海辺のカフカ』の世界のマジックは、仏教や古典文学などという、日本の伝統的な文化から生まれたものだと考えられる。具体的には、遍路の地として知られている〈四国〉という舞台設定、また『源氏物語』から影響を受けたと思われる〈生き霊〉の登場などは、『海辺のカフカ』における魔術的リアリ

ズムの起源である。また、それと同時に、村上の魔術的世界観の背景にもなる  
と言えよう。

## 村上春樹による聖地アトスへの巡礼

オウ  
王 静 (名古屋大学大学院博士課程)

『雨天炎天——ギリシャ・トルコ辺境紀行』(1990年)の中で、村上春樹によるギリシャ正教の聖地アトスについての訪問記が収録されている。周知のとおり、アトスは、世俗を排除し、神への祈りを生活の中心にする様々な修道院の集合体である。この旅行記の冒頭から、村上は、現実世界と異なる原則に基づく異世界としてアトスの像を立ち、あちら側とこちら側の境界線をはっきりとつけている。そのような現実世界の対極に置く異世界の描き方は、『雨天炎天』の前に書かれたフィクションの『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』(1985年)の「世界の終り」及び『ノルウェイの森』(1987年)の「阿美寮」に共通している。アトスに「どうしても一度訪れてみたかった」という村上の心情は、まさにフィクションで異世界を構築する彼の意欲と強く響き合っているのである。

リアルに存在する異世界アトスの何に惹かれ、何を問題にしているのか。従来の研究の中では、このアトス訪問記についての論が少なく、一つだけ挙げられる今井清人の論「村上春樹とキリスト教——なぜアトスに行ったのか」(『国文学 解釈と鑑賞』74(4)2009年4月)は、アトスをキリスト教の象徴と見なしている。しかし、『雨天炎天』におけるアトスは、「既成宗教」の意味を超えている。作中で村上は、60年代以降アトスに訪ねる若者が増える現象に触れ、「この地では宗教は文字通り生きているのである」と語る。村上がアトスの聖地に訪ねる背景の中には、オウム真理教事件の前の1960年代後半から70年代にかけて流行したニューエイジの雰囲気が存在しているのである。本発表では、当時アトスが日本で受容されているあり方と対照しつつ、村上が織り込んだアトスのあり様を分析し、オウム以前あちら側の世界に行く意味を探求してみる。

## ポスターセッション題目

『徒然草』の地名新考

<sup>コウ</sup>  
黄

<sup>イク</sup>  
昱

(総合研究大学院大学博士課程)

漱石の『琴のそら音』

— 空想の思いを馳せた不安 —

<sup>ゴ</sup>  
呉

<sup>セツコ</sup>  
雪虹

(高雄市立空中大学外国語学系主任)

戦略としての手記

— 太宰治『人間失格』における額縁構造と「道化」 —

<sup>タムラミユキ</sup>  
田村美由紀

(総合研究大学院大学博士課程)

川端康成『抒情歌』再考

— 近代における“口承文芸”の可能性と限界 —

<sup>オオクボミカ</sup>  
大久保美花

(明治大学大学院博士課程)

『うつほ物語』の計量分析：

「楼の上上」及び「楼の上下」における

形容詞・形容動詞の量的特徴について

<sup>ツチヤマ</sup>  
土山

<sup>ゲン</sup>  
玄

(同志社大学研究開発推進機構特別任用助教)

〈新作薫物〉の発祥と実相について

— 『源氏物語』は日本の薫物を変えたのか

<sup>タナカ</sup>  
田中

<sup>ケイコ</sup>  
圭子

(広島女学院大学総合研究所客員研究員)